

「モルドバドキュメンタリー2011」第7号

発行日 2011年4月25日

発行人 モルドバ復興支援協会 事務局長 沓澤正明

住所 〒651-1132 兵庫県神戸市北区南五葉3-2-35

電話 078-594-2785 Email molkor.jp@ybb.ne.jp

2011年8月27日はモルドバ共和国独立20周年記念日。



如是の木 絵：侑霞

如是という文字で描かれた絵。

「侑霞 (YUCA) 展 KAWAZU-V」は4月19日に終わった。

モルドヴァ滞在報告 2011年4月5日(火)～10日(日)

早稲田大学教育学研究科博士課程2年 川村容子

今回は、イタリアに留学し壁画の修復をしつつ、かつルーマニアの修道院の壁画修復の研究をしている博士課程の友人、翠さんとモルドヴァを訪れた。彼女は、東ヨーロッパの壁画に関心があり、かつ私のセンターでの活動に関心を持ってくれ、子どもに折り紙を教えたい、ということで今回モルドヴァを訪れた。そのため、今回はデイケアセンターと修道院や教会を訪問することにした。彼女にモルドヴァの良さを知ってもらおうことが、私の中での目標であった。そしてそれを通じて彼女の中で何かよい気づきがあったらいいな、と思っていた。

また、モルドヴァ人の温かさを通じて助け合う大切さを感じてもらい、彼女の専門を世界のどこかの人が幸せになるために生かしてもらえたら、また何らかの形でモルドヴァの子どもたちが喜ぶことをしてもらえたら、と密かに思っていた。

4月5日(火)

午後14時のバスで、ヤシから一緒にキシナウに向かった。前日の夜、クマンバチが部屋にいたせいで退治に追われ、寝るのが明け方になってしまった。縦横2cmくらいはあったであろう巨大な蜂で、翠さんが退治中に蜂が弱りかけている最中刺されるなど、てんやわんやの夜であった。

どうにかバスに乗り込んで一番後ろの席を陣取った。そう言えば、モルドヴァの詳しい話をしていないことに気づき、どんな知り合いがいて、どんな予定であるのか、センターについても話した。バスがものすごい揺れで、寝たくても眠れない。しかし、長旅で疲れたのであろう、みどりさんは私の寝袋を枕にスヤスヤ寝ていた。乗客が私たち含めて5、6名だったからであらうか、国境では30分も待たずに出発することができた。結局、ヤシから3時間ほどでキシナウに着いた。キシナウに着くと、私はトイレを我慢しきれず、荷物を全部みどりさんに預け、近くの銀行に駆け入った。トイレを貸してくれるように受付の人に頼むと、断られたが、足をバツェンにし、「ヤシからバスで来たんです～～」、と我慢しきれない表情を露わにすると、OKが出た。本気で表現すれば伝わるものである。受付の彼女は私をトイレまで案内し、私がトイレのドアを開けるまで私のことを見届けた。出るとそこにまだ居て、私が出た後もトイレのドアを開けて中を確認していた。銀行ということもあるのだろう、私が爆弾か何かを仕掛けていないか、確認していたのだと思う。

日本ではまずこんなことはないだろう。これまでの私では、きつとこの彼女が確認した行動に気付かなかったと思う。しかしルーマニアという、人を疑って見る風潮が日本より濃い社会で生活してきたからであろうか、彼女の行動を理解することができた。

その後、西川さんのお宅へ徒歩で行き、すぐにマヤの誘いで学生による演劇を観に行っただけで自然と笑みがこぼれる。うたた寝しながらニコニコしながら鑑賞した。その後、マヤと旦那さんをスーパーやレストランに引き連れまわすことになってしまったが、終始彼らは「問題ないよ」と笑顔で我々の勝手な行動についてきてくれた。ほんとうに心の優しい夫婦である。疲れていたであろうに。彼らは人のために何かすることに喜びを感じる夫婦なのであると、改めて思った。結局その夜は西川さんのお宅で焼き魚とお味噌汁をごちそうになった。久々のきちんとした日本料理、おいしかったです。ありがとうございました、西川さん。

4月6日(水)

朝からライサさんとみどりさんと教育省に行った。中島先生との共著の論文のためのインタビュー調査である。教育省は「モルドヴァ政府」という建物の一つの部署にある。「モルドヴァ政府」は、キシナウのシュテファン・チェルマーレ通りに面し、キシナウを代表する教会のちょうど向かいの建物である。

ライサさんは、この建物で20数年働いていたらしい。働いていた時は顔パスで入れたようである。入館証をもらいさらに荷物検査のゲートを通して(特に何も検査されなかった)中に入ることができた。教育省の国際関係部長にお話をうかがうことができた。あらかじめ、ライサさんに調査内容をお伝えしてあったので、彼女がその回答を文書にまとめておいてくれた。色々わしく聞くことができたので、大変ありがたかった。1時間ほど滞在した。インタビューの間もライサさんは、私の分からないところを簡単な言葉で説明してくれたり、私にかわって部長に質問してくれたりした。ほんとうに親切で心を理解してくださる方である。おかげさまでよい調査ができた。がんばっ

て論文を書こうと思う。

その後、お昼ご飯をライサさんおすすめの食堂で食べ、西川さんのお宅で少し休んだあと、カザネシュティに向かった。センターの給食をごちそうになり、子どものいる教室に向かった。いつものように、これまで学んだ日本語の表現、対話、ひらがな・カタカナ、歌、詩、またルーマニア語の詩や歌を元気に我々に披露してくれた。エレオノラ先生の日本語教え方は、工夫があちこちに見られる。たとえば、ひらがな・カタカナは、子どもに黒板に出て名前を書かせたり、先生がカードにひらがな・カタカナを書いたものを一枚ずつ見せて全員で答えさせたり、お話「おおきなかぶ」をひとりひとりノートに書かせたものを全員で朗読させたり、子どもを前に呼んでルーマニア語の単語の書いてある紙から一枚選ばせて日本語の単語を言わせたり、対話を暗記させたり…などなど、子どもが飽きる間もなく次から次へと先生のお題が出てくる。私が教えた日本語はわずかであったのに、よく先生がここまで色々なものを自分でも勉強して生徒に教えてくださったと思う。先生のエネルギーと教育への熱意に脱帽である。しかし、これからのように発展させていくかが、問題である。会話ができるようになるくらいもっと日本語を教えたいとも思うのだが、それには1か月、2か月という単位で滞在する必要がある、難しい。子どもが楽しめるような、なにか作品作りなんかできたら面白いような気がする。

センターの後、何人かの子どもとライサさんと一緒に村を散歩した。教会に入った。中では最近亡くなった方がいたようで、教会の中央の灯りには黒いハンカチが何枚かけられていた。2、3名の女性がいたように思う。みどりさんの影響もあり私も教会の壁画を見るようになった。壁画は比較的新しいようであったが、手入れが不十分で剥がれているところがちらほら見られた。無言のまま二人で教会内部のあちこちを見ていると、ライサさんがろうそくを買って私たちに渡してくださった。他のろうそくから火を移し、蠟を下に垂らして蠟燭台に固定した。イタリアやルーマニアで古い教会や有名な壁画を見てきたこともあり、その意味では正直私にはこの教会はあまり印象的ではなかった。村のための素朴な教会という印象であった。教会を出ると、そのまま隣村との境界となっている川まで3人で歩いていった。日が少し傾きかけていた。「空がひろーい」とみどりさん。私も初めてカザネシュティに来た5年前に

も同じことを言っていたことを思い出した。カザネシュティの空はほんとうに広い。山がなく、低い丘が地平線になっている。新芽が出始めた平原。これが大地というものか、と気付かされる。思いっきり伸びをすると天と自分がつながっている感覚になる。ビルで空の小さくなった東京の都会で育った私には、この解放感がたまらない。向こうから2人の若者の乗った手作りの車がやってきた。モーターにタイヤと座席とハンドルを付けただけの、最低限の骨組みだけの車、というよりモーターで走るキャリアカーである。少しバランスを崩すと落ちるであろうが、そこそこのスピードで我々の横を通過した。私はみどりさんに言った、「でもさーここで生まれたらどうだろうね〜。大自然の中で生活できるのはいいけど、何もすることないよ〜たぶん私たちが知っているような情報や持っているものは手に入れないだろうねー」。「うんー」とみどりさん。

日が沈むと冷え込んだ。宿泊先の家の子どもが槓と石炭で火を焚いてくれた。この光景はもう2、3度見ているのだが、ほんとうに子どもが家の手伝いをよくしていて、子どものころの私を思い返してみると恥ずかしくなる。みどりさんもそう言っていた。子どもはその他、水汲みや掃除、家畜の世話、畑の世話、料理など、なんでもするのである。ライサさんの準備してくれた夕食を終えると、寒さをしのぐようにしてひとつのベッドに3人で座り、枕に寄りかかりながら夜12時くらいまで話した。ライサさんがずっとしゃべっていて、たまにこちらから話すとライサさんがそれに関連して話を思い出して話題が変わる、ということがずっと続いた。ライサさんともっと心が近くなった感覚がした。心をゆだねて話すことができた。ゆったりとしたいい時間が過ぎていった。

4月7日（木）

今日は折り紙を子どもたちに教えるイベントが控えていた。朝は連日の疲れからだろう、ゆっくり起きた。お昼頃に朝食を終え、みどりさんと折り紙の打ち合わせをした。みどりさんは折り紙をよく知っている。彼女の提案で、同じパーツを組み合わせた立体を作ることになった。手先がそこまで器用でない私には少し難しかったが、どうにかつくることができた。

学校に着くと食堂でセンターの子どもが昼食をとっているところであった。我々もセンターの昼食をいただき、それから子供たちに遅れてセンターに行った。前で折り方を見せながら、折り紙を教えた。みどりさんには机間巡視をしてもらった。子どもに折り紙をやらせると面白い。その子どもの性格が分かる。

丁寧な折る子、あまり丁寧に折れない子、途中であきらめる子、できる子に全部任せる子。今回の作品は3つのパーツを組み合わせるものであるが、組み合わせるところで私は分からなくなってしまった。子どもに教えながらなっていたが、そうこうしているうちに、子どもの方が先に解決して作品を作ってしまった。みんなだいたい作り上げたところで写真撮影をした。小2くらいのトゥリカくんは、その間も粘って作り上げていた。後でみどりさんは、「彼、職人向きだね〜。なんか物つくらせたらうまく作りそう。」と言っていた。

その後、センターの女の子の家を訪問することにした。この子は昨年秋に、私がセンターを訪問して両親のことを尋ねると、泣き出してしまった子だったので、心配であったため、あらかじめライサさんに訪問したい旨を伝えておいた。泣いた理由は両親が出稼ぎに行ってしまったので、寂しかったためであったが、少し気になっていたので訪問させていただくことにした。

帰りの方向が同じ何人かのセンターのこどもたちと共にその子の家に向かった。子どもたちは、日本語の単語をとでも知りたい様子で、「これはなんていうの?」と矢継ぎ早に質問してきた。みんなでにぎやかにおしゃべりしながらその子の家に向かった。少し先に見覚えのある男の子の姿が見えた。折り紙のトゥリカであった。大量の枝が置いてあるところに近づくと、小さいからだがかく隠れる何倍もの量の枝を持ち上げて家の庭へと運んでいた。家の手伝いをしているのである。庭にいる彼にあいさつすると、外に出てきてあいさつしてくれた。

子どもの家に着くと、両親と近所の人が出稼ぎをし、最近の様子や出稼ぎ、仕事のことを聞いた。出稼ぎは2人で行っていたが、体力的にも大変で子どももいて心配だし、帰ってきた。今は学校の清掃婦として働かせてもらえないか、聞いてみようと思っているところだ。「目玉焼き食べる?」と聞かれた。せっかくの提案であったが、村の人の生活が大変であることを知っていたので、遠慮しようと思った。でも、みどりさんに村を知ってもらいたい気持ちもあったので、提案をお受けすることにした。ごはんは目玉焼きだけではなく、魚や手作りのパンなど色々あった。ごはんを食べながら、お母さんは我々がどんな勉強をしているのか、質問してきた。みどりさんはイタリアで壁画の修復、私はルーマニアで詩の勉強、と答える

と、少しうらやましそうな顔で一瞬下を向いていた。なんだか申し訳ない気持ちになった。この子はどんな夢を持っているのだろう？と一瞬聞きたくなった。しかし、これを聞いたらお母さんをまた複雑な想いにさせてしまうのではないか、と思い、質問するのをとどまった。これは後でライサさんに聞いた話なのであるが、農村の親というとはなから教育を受けることに意味がない、と思う親の方が多いのではないかと思われるかもしれないが、そうではなく、ここでは多くの親が子どもに教育をきちんと受けさせたいと思っているそうである。

帰り道、ある女性が自家製のブルーベリージャムを渡しに来てくれた、センターに通う子を持つお母さんであった。気遣いがうれしかった。夢について気になっていたの、その子やどこからともなく集まってきたセンターの子たちに、家の方へ向かいながら聞いてみた。「お医者さん」、「デザイナー」、「フランス語の先生」など様々であった。訪問したその子は、「デザイナー」、「語学の先生」…など、「えっとね、それからね〜」などニコニコしながら10個ほど挙げていた。「お母さんにはね、そんなに夢があったら死ぬまでに全部叶えきれないわよっていわれるの」と言っていた。

宿泊先に着くと、その子どもたちがトラックの荷台に家の庭のゴミを積み、庭を掃除していた。この子どもたちは母親に育てられている。父親は家庭内暴力が原因で離婚している。母親は生計を支えるために、ジャガイモ畑の手入れの仕事で雇われて1か月単位でしばしば家を留守にする。

夜、みどりさんと話した。センターの話になり、「ほんとママ（私のあだ名）はママにぴったりのことしてるよね。研究じゃないね。もうこれで十分と思う」と言ってくれた。研究に行き詰まりを感じていた私の縮こまった心がふわっと解放された。また、みどりちゃんはモルドヴァの人について思いをめぐらせたような顔で、次のようなことを言ってくれた。「ほんと人が温かいね〜。ほら、あの教会の壁画、剥がれてるとこあったじゃない？あれ直すのそんなに難しくないのよね。あれ直したらここの村の人喜ぶだろうな〜って思ったよ。」どうやら直すのには1か月くらいかかるらしい。実際やるかやらないかは別として、彼女がその言葉を言ってくれたということ自体がほんとうにうれしかった。モルドヴァ人の温かさが彼女の胸に届いた証拠であったと思う。また、彼女は東ヨーロッパのある国の世界遺産に登

録されているものの財政難で修復ができない教会の修復をしたい、と話していた。どうやらイタリアは修復するのに、修復する方がお金を払うらしい。国家財産を修復するとそれが修復者の業績にもなるので、その業績のためにお金を払うらしい。しかもアジア人は修復の世界では見下されるらしい。「やっぱり感謝されて仕事したいよね」と話していた。

またみどりさんのノン・ストップ・トークが始まった。子どもの頃の話、政府関係時代の話、など色々だった。ライサさんの話は面白い。眠気から途中で意識を失いながらも話続けた。そのライサさんの様子に笑った。その中で、永治くんに前回会ったときにライサさんに質問してみたい、と言われたことを質問してみた。「ライサさんは、ミキさんの無理難題にどうしてあんなにも冷静に対応できるんですか？」それに対し、ライサさんは、「問題というのは冷静にならないと解決できないからです」とはっきり言っていた。

4月8日（金）

帰りの車の中で、みどりちゃんは「また来たいな。今度はいろんな友達と一緒に来たら面白いだろうな。芸術の友達と一緒にだったらみんないろんなことできるし、ほんと面白いと思う。ある子はバイオリン弾いて、ある子はダンスして、私は絵描いて…！」まさに私が実現できたらいいな、と思っていたことだったので、彼女からその言葉が出てきたことがとてもうれしかった。専門を持った友達が集まったらものすごい力になると思う。私のフィールドはモルドヴァであるが、ある時は私のフィールドにみんなが集まり、またあるときは友達のフィールドに私も含めみんなが集まり、またあるときはまた別の友達のフィールドにみんなで集まり…ということをしていきたい。そんなことをして、みんなでみんなのフィールドを共有・協力しあっていったら、最後はみんな同じ目標に向かっていっているような気がする。少しでも世の中の人が幸せになれるような活動を、それぞれのフィールドでみんなでつながり合いながらできたら素晴らしいと思う。

この日は私の29歳の誕生日であった。私は大好きな友達と大好きなライサさんと一緒に居れるだけで幸せであったので、もう十分と思い、二人にはそのことは言わなかった。カザネシュティからキシナウに向かう途中で修道院に寄った。みどりさんは古い壁画に関心があるので、歴史のある修道院に行ったのだが、教会の内部は金ピカか絵が全く書かれていない状態であった。共産主義時代に、この修道院の教会は精神病院として使わ

れて壁画は消されてしまったため、近年新しくつくりかえた（ている）とのことであった。

西川さんの家に着きメールと確認すると、父親からお誕生日おめでとうのメールが入っていた。母に電話するよにとのことだったので電話した。お誕生日おめでとうと言ってくれたのでうれしかった。その日はみどりさんと10時間ほどしゃべりのんびりして終わった。寝る前にみどりさんは「村の子ども、たくさん夢があるんだね。私たちはほんと小さい頃から最高の教育を受けさせてもらって、自分がしたいことを何でも選べたけど、あの村の子たちはそうじゃないんだよね。自分があそこに生まれていたらどんなふうになっていただろうね。」と言っていた。私がずっと考えてきたことだった。同じように感じてくれたのがうれしかった。

4月9日（土）

マヤちゃんの田舎に招待され、朝からマヤちゃん夫婦とマヤちゃんの弟と一緒に田舎に行った。その後、キシナウの教会をいくつか見た。どれも新しい壁画であった。途中でライサさんも合流し夕食を食堂で一緒にとった。

4月10日（日）

朝一で前日に行きそなった教会に行った。日曜の朝ということもあり、教会の中は満員電車状態であった。やはりどれも新しい壁画であった。

ジーマさんの車でライサさんと一緒にみどりさんを空港まで送った。チェックインを待つ列で前に並ぶ夫婦が別れを惜しんでいた。小学生低学年と高学年くらいの女の子の子ども2人もいた。イタリア行きの飛行機なので出稼ぎに行くのだろう。夫は大きなトランクを持っていた。別れの熱いキスをしていたが、ライサさんはそれを見て「私はこういうの好きじゃないのよね。日本人みたいでしょ、私」と言っていた。笑った。みどりさんが見えなくなるまで送った。空港を出ると遠く続くまっすぐの丘にずっと一列に木が生えている懐かしい景色が広がっていた。モルドヴァの空港に来たのは3年ぶりくらいであったが、5年前に初めてこの空港に来たときのことを思い出していた。その当時と変わらず私にはとても美しく見えた。

あとがき

私が出会ったのはたまたまモルドヴァであった。ある時、世界の生まれた境遇による不公平さに気づき、当時抱えて

いた自分の悩みはなんとちっぽけなものなんだということに気付いた。そして、恵まれない子どもを一人でも笑顔にしたいと思った。きちんとごはんを食べて教育を受けられるようなお手伝いがしたいと思った。国はどこでもよかった。大学のボランティアセンターを通じて出会ったモルドヴァ…このモルドヴァを通じて色々な方と出会い、そして本物の方々と出会うことができた。

代表のミキさんはいつも言う、「タメ（為）に生きればいいねん！」。モルドヴァの活動を6年続けて、その意味がようやく腑に落ちてきた。面白いもので我を無にして「タメに生きて」いると今度は自分を助けてくださる方が現れ、またよい方向に道が開かれ、そしてまたさらに「タメに生きよう」と思えるようになるのである。しかし、ここルーマニアに来て、「タメに生きている」かと思いきや裏に私欲をたくさん隠している人にも出会ってしまい、心傷つくこともあった。心が折れそうになった。もしかしたら、我を無にして「タメに生きる」のは親の子に対する感覚と似ているのかもしれない。復興支援協会の現地コーディネーターのライサさんは家族に対してももちろん活動に対して「タメに生きれる」人である。このミキさん、ライサさんというモルドヴァの「タメに生きれる」二人を先頭に、そして村の子どもたちを賢明に支えようと子どもたちの「タメに生きている」センターのスタッフがいる限り、このセンターの活動は発展していくに違いないと思う。

（日々、この状況を日本の支援者のみなさんにお伝えしたいと思い、常日頃ブログを立ち上げたいと思っ

人は本心で何かを与えられると、自然と与えたくなるものである。神様は人間をうまく創られたと思う。この与えられそして与え、その与えられた人はまた誰かに与え…というバトンを、命尽きるまでできる限り多くの人に伝えていきたいと思う。

カザネシュティ村訪問を通して感じたこと

東京芸術大学大学院美術研究科博士課程 日高翠

4月5日、友人の住むルーマニア東北部の都市ヤシからバスでおよそ3時間、モルドバの首都キシナウに入った。道中は、広い平野に舗装の悪い道が続くばかりで、地図で見る国土は小さいのにやはり大地は広大だとしみじみ感じる。その感覚は、視界を邪魔するものが何もないせいもある。

予定時刻通りにキシナウに到着、東欧の人は意外と時間に正確である。街は思ったよりも都会で、ゴミが少ない。人々の生活水準に対して、物価が異常に高いことに驚いた。普通に考えて、平均的な収入では暮らしていけない。国民の海外流出が増加し続けるのも当然である。

キシナウで一泊し、翌日カザネシュティ村へ向かった。村までダイレクトでタクシーを使用して、2時間程度で村に到着した。通りはどろんこで、井戸のある平屋が並んでいて、焚火の煙が立ちこめている。家畜の臭いをかいだのは久しぶりだ。村では、友人の知人宅にお世話になった。家は木造で、いくつかの部屋がほぼコの字型につながってできており廊下はない。すべての部屋にベッドがあり、壁はカラフルに塗装されていて、絨毯などが飾ってある。手作り感があって、素敵だ。暖炉があってそこだけが暖かいが、家の中は基本的にとても寒い。春なのに屋外よりも冷えるくらいで、常に防寒態勢である。

ところで、村には、水道がない。畑の脇に手作りの木製トイレがあって、屋根がないので見上げると青空が見える。夜は星がきれいだろう。家の中には井戸水をはったバケツがあって、それで手を洗ったり食器を洗ったりする。「日本では壁から水が出るのでしょうか？」と聞いた村人がいるそうだ。彼らが東京に来たら、どんな顔をするだろう。

到着した日の夕方、村の小学校を訪問した。ここには、日本のNGO団体が設置する子供のためのデイケアセンター(以下センター)がある。校内の教室を借りて、通常の授業の後、昼食をとって午後5時まで授業をする。1年生から9年生を対象としており、希望する子供たちは無料で参加できる。センターの活動は子供の教育支援と精神ケアを目的としていて、私の友人は5、6年前からセンターを度々訪れて子供たちと過ごしてきたという。

子供たちは日本文化や日本語を勉強していて、日本の歌や俳句を披露してくれた。先生も生徒も一生懸命で、可愛かった。私は幼少時西欧に住んでいたが、その昔もまさにこんな感じだ

ったなあと思出した。皆、純朴で、珍しい訪問者にウキウキしている。私は今、再びイタリアに暮らしているが、最近の西欧でこの種の歓迎を受けることはあまりない。下校時には女の子たちが私たちを待っていてくれて、手をつないで一緒に帰った。ここは、思っていたよりも緑が多く、豊かな土地だ。何も手入れしなくても果物が生って草花が茂るといふのだから、よほど肥沃な土壌なのだろう。見上げたら、一面が空で、ちょっと驚いた。東京ではこんな広い空は見られない。

翌日は、センターで子供たちに折り紙を教えた。三面体という、三つのピースを組み合わせてダイヤモンド型の立体を作る折り紙で、友人がルーマニア語で説明してくれた。実は私は十二面体を教えたかったが、友人の判断でより単純な三面体になった。結果、子供たちは自分の手で最後まで楽しんで作ることができて、とても喜んでいて。私の友人はいつも相手の視線で考えられる人で、さすがだと思った。人にはそれぞれ得意分野があって、自分以外の人は、自分とは異なった特長を持っているという当たり前のことを私はよく忘れる。自分のできることができない人はたぶん、自分のできないことができる人であって、それは互いに尊重すべき個性だ。教育関係に興味を持つ友人や普段接することのない子供たちと過ごして気付かされた。自分の世界に閉じこもっていると、決まった尺度でしか物事を考えられなくなるもので、それは時にとても危険だ。

授業の後、ある生徒の家を訪問した。急だったのにもかかわらず食事まで御馳走してくれ、とても良い時間を過ごした。私と友人がそれぞれ外国で研究活動をしていると知ると、母親が一瞬うらやましそうな切ない表情になった。あとで友人に聞いたのだが、村の人々は経済的に厳しい環境の中でも、子供たちにはできる限り勉強を続けさせたいと思っているという。私は、彼らは子供を早く働きに出したいと考えているのかと思いきやこいでいたので意外だった、同時に、このような発展的思想を穏やかに受け入れている彼らは素晴らしいと思った。彼らの教育に対する関心はセンターの活動にとって大きなプラスであるに違いない。この国の社会的・経済的課題は根深く、解決までには長い道のりになるだろうが、医師や先生になりたいという子供たちの夢はかなわない望みではないはずだ。私自身、奨学金を得て充実した留学生活を送っている。夢を実現させるために何が必要でどのような可能性があるのかという情報を、

積極的に村の人々に伝えていきたいと思った。道が開けそうなときに進んでみようと思う勇気があれば、解決できない問題はない。

今回のカザネシュティ村訪問では、シャワーに入れず、たんぱく質ばかりを摂取していたので体はとても疲れたが、久々にのんびり過ごして、人のあたたかさに触れて、心から楽しかった。東京の暮らしは便利だけれど慌ただしい。24時間営業のコンビニがあって、3分毎に通る電車にも走りこむほど人々は急いでいる。動物は動物園にいるもので、いろんなものが自動で、水は壁から出る。モルドバの村に住む人々とはいうと、家族と暮らせる幸せを感じながら、畑仕事や家畜の世話をして長閑に過ごしている。必要なものは自分の手で作る。祈り働けという昔ながらの生活を送るモルドバ人の心のゆとりは、忙しい日本人が科学技術の発達と引き換えに忘れてしまった人間の良さなのだろう。

一方で彼らにもまた、日本人の精神から学べることがあると思う。日本人の問題解決能力は高く、一つの目標に向かって惜しみなく努力を重ねることができる。三月十一日の大震災で多くの人命が失われ、国家も大打撃を受け未曾有の危機に陥っているが、世界が騒ぎ立てる中ですでに、日本人は静かに立ち直り始めている。規律正しく健気に、日本はさらに強くなって復興するに違いない。そのあきらめない精神と勤勉さは、我々日本人がモルドバ人に伝えていける心の財産だと思う。

日本の NGO 団体が遠くモルドバで行なう活動は、経済面・教育面の支援だけでなく相互の文化的精神的交流という側面を持っている。様々な分野の人を巻き込んでさらに幅広く、長く活動を持続してほしいと思う。

最後に、今回モルドバ訪問の機会を与えてくれた友人、川村容子さん、そしてモルドバで大変お世話になったすべての友人たちに深く感謝申し上げます。

朗報

2011年4月24日、三重県津市市議会議員選挙に保守系無所属で立候補していた小林貴虎氏が当選しました。奥様はモルドバ人ステラさんです。小林氏は英日同時通訳ができます。三重は東京、神奈川に次ぐ多くの在日外国人が一緒に暮らしている多文化共生のモデル的な地域です。